この詩集は従来の現代詩という殻を破り、新しい詩の世界を目の前に見せてくれる前代未聞、面白いにも程がある詩集です。

（誌面サンプル）

１．この詩集のなりたち

この詩集は月刊誌『ココア共和国』に投稿した詩を中心に成り立っている。時期的には二〇二三年六月から二〇二四年一二月に当たる。

『ココア共和国』の入選作には「佳作」と「傑作」がある。最初は箸にも棒にも掛からなかった。落選ばかり。そのうち時々「佳作」に選ばれるようになった。「傑作」にはごく稀にしか選ばれなかった。そのごく稀な時は、自分でもよしこれは新しいものが書けたと実感した時に限られていた。

（中略）

週に一回ｎｏｔｅに投稿し、一ヶ月溜めた詩の中から自分がいいと思うものをひとつだけ選んで『ココア共和国』に投稿する、という日々が始まった。週に一回詩をひねり出すのはかなりきつい。週末から翌週の前半は、目につくあらゆるものを頭の中でかき混ぜ、心の底に沈んでいるあらゆる記憶を掘り起こそうとした。

江戸時代ならばとっくに死んでいたに違いない歳になって、やっとというか、急にというか、詩のリハビリを始めたのである。

『ホワイト・アルバム』という詩集のタイトルは、ビートルズが一九六八年に発表した二枚組レコードアルバムで通称『ホワイト・アルバム』と呼ばれるアルバムのタイトル名そのままである。

全三〇篇の詩集にしたかった。『ホワイト・アルバム』が全三〇曲だったからである。詩を「ＤＩＳＫ１」と「ＤＩＳＫ２」に振り分けることも最初から決めていた。ＣＤ版の『ホワイト・アルバム』がそうなっていたからである。つまり、ビートルズのレコードとＣＤそのままということになる。中学生の頃からビートルズばかり聴いていた私としては、自然な成り行きといえる。

（『あとがき』より）

２．詩の一部紹介

とにかく
私は
鳩サブレ―が食べたい
バリバリ噛み砕いて
かたちが崩れて
途中で割れたりして
ばらばらのかけらになって
ぐちゃぐちゃになって
胃の中に入ってゆく
鳩サブレ―が食べたい
胃の中に置き忘れた
歯ブラシには悪いけれど
とにかく
わたしは
鳩サブレ―が食べたい

（中略）

夕日ははやく沈め
赤くならなくていいから
はやく沈め
とにかく
私は
鳩サブレ―が食べたい
誰が何と言っても
私は
鳩サブレ―が食べたい
　（注）『鳩サブレ―』は株式会社豊島屋の登録商標

（『鳩サブレ―が食べたい』抜粋）

MRIの長いトンネルを抜けたら
私は一七歳の君になっていた
これで　やっと　あの日に戻れる
いつもの道で一日に二回すれ違ったのに
一度も君に気付かれなかったあの日に

私はあの日にいた
今度こそ君に逢える
あの日と同じように
私は早めに家を出て
いつもの道を通って高校に向かった
正門に近付いた頃
後ろでヒラメちゃんの声がした
おはよう
正門から十七歳の僕が走ってきた
私には目もくれないで
十七歳の僕は
嬉しそうにヒラメちゃんにノートを貸していた
何やってんだ　このバカ
こっちだろ
こっちを見ろよ
また逢えなかったじゃないか
初めからやり直し

（『あの日のバカ』抜粋）

夕日は赤くない
やっと気がついた
夕日は金色に光る鏡だ
地平線に沈む前に
空の粒子をオレンジ色に燃やす

（中略）

たとえ言い間違えても
本当のことを言わなければ
ほかに何を言ってもだめだ

夕日が沈んだ後も
まだ明るい東の空に
白い飛行機雲が残っていた
飛行機は空に何か言いかけていた

私は藍色の海をひとりで歩いていた
私の影は私を振り切って
初めて歩く魚のように
暗くなった海を泳いで行った
夕日は
沈んでばかりいないで
いつか
本当に赤くなれ

（『夕日はいつか赤くなれ』抜粋）

見たこともない青空が家の庭に落ちていた
「危険！　飛び込み禁止」の看板を立て
「KEEP　OUT」の規制線を張り巡らせた
次の日から庭が飛び込みの穴場になってしまった
月曜日
植木鉢で飼っていたメダカが飛び込んで死んでいた
空の底から掬い上げて雲を敷いた棺に納めてやった
火曜日
きのうブルーだった月曜日が空の底で眠っていた
目覚めると朝焼けのなかに消えて行った　大丈夫？
水曜日
卒業アルバムから消えた君が空の底にいた
僕は君を抱きしめてアルバムにそっと戻しておいた
木曜日
どおってことないさまで飛び込んだ
明日があるさを二人で歌って熱い缶コーヒーを飲んだ
金曜日
いつもの道に迷った散歩道が空の底に沈んでいた
君の記憶はまだ失われてはいないと道路に書いた
土曜日
メトロン星人よりも赤くなったウルトラセブンが
夕焼けの底に向かって最後の飛翔を試みた
日曜日
見たこともない青空が庭から消えていた
何も知らずに
今日も待ちぼうけといつかきっとがやって来た
おーい
聞いたこともない声が喉から聞こえた
見たこともない青空が今度また落ちてきたら
一番に飛び込むのは絶対にこの僕だ　絶対に

（『見たこともない青空』全文）